

所属	心理学研究科 臨床心理専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	久保 祐	指導教員 (主査)	丹 明彦

論文題目	日本におけるビルマ系難民のメンタルヘルスに影響する要因と 心理・社会的適応過程に関する研究
------	--

本文概要	
<p>【問題意識・目的】 難民とは紛争や人権侵害などを背景として強制的に他国に逃げざるを得ない人々のことである。本研究では日本における難民認定者の多数を占めるビルマ系難民を対象とした。日本において近年難民申請者数は著しく増加しており、難民申請期間の長期化など困難な状況が続くため(鶴川・野田, 2013), メンタルヘルスの悪化が予想される。Gonsalves (1992) による難民の適応過程モデルでは, 到着直後には母国との離別に伴う感情の処理, 模索・安定期では柔軟な文化適応などを経て, 通常生活への復帰期へと至る。日本においては模索・安定期に留まるものも多いと指摘され(森谷, 2010), 心理・社会的適応過程を把握することは極めて重要である。そこで, 本研究では, 移住後の生活困難, 文化適応およびソーシャルサポートに関する要因が, 精神症状にどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。また, 日本に定住するビルマ系難民の語りから, 心理・社会的適応過程を明らかにする。</p> <p>【第1研究】 日本で生活するビルマ系難民 38 名を対象とした質問紙調査を実施した。調査内容: ①移住後の生活困難尺度 25 項目 (Silove et al., 1998) ②文化適応尺度 39 項目 (Birman & Trickett, 2001) ③ソーシャルサポート尺度 16 項目 (Seidman et al., 1995) ④精神症状 25 項目 (Derogatis et al., 1974) 属性・尺度の相関分析: 「アイデンティティ (ミャンマー)」は「移住ストレス」($r=-.453, p<.05$)との間に比較的強い負の相関がみられた。精神症状に対する重回帰分析: 抑うつ症状尺度に対して, 「移住後の生活困難尺度」($\beta=0.657, p<.01$) および「アイデンティティ (日本)」($\beta=0.478, p<.01$) は正の影響を示した。考察: 安定した生活を送るためには日本文化への適応を強いられる, 一方でミャンマー的アイデンティティを保つ方が精神的な健康を保つことから, 生活適応と心理適応は極めてアンビバレントなものであることが明らかになった。</p> <p>【第2研究】 ビルマ系難民 10 人を対象とした半構造化面接を実施し, 分析テーマを「失われた安定・安心を, 日本という異国で模索しながら再び獲得していくプロセス」とした。結果および考察: 安全の喪失から安定へと至るプロセスには, 6 段階あることが見出された。第1段階<安全の喪失>とは, 母国の政情不安により他国への移住を強いられる時期である。第2段階<安全・安心環境の確保>では, 安全な環境を得ることで安心感を覚える。第3段階<不安・葛藤を抱える時期>とは, もっとも困難を抱え, 多くの課題に直面する。第4段階<模索する時期>では, 厳しい難民制度に対峙し, 長期の申請作業に苦労する。第5段階<基盤を構築する時期>では, 在留資格を得て生活の見通しが立つようになる。第6段階<より安定を求める時期>とは, さらに安定的な定住を目指した在留資格の取得が目指される。</p> <p>【総合考察】 ビルマ系難民達は, 日本での自立した生活を果たすことと同時に, 難民性に基づく母国への思いを抱え, 苦労しながら難民申請を経て日本での安定した生活を望むという二重の心理・社会的適応が必要となる。移住後には多様な苦労を強いられ, 多くの心理的負担を強いられるが, 他者への支援意識を強く持ち, 相互補助の体制づくりという主体性が母国コミュニティのなかで発揮されていた。ここに難民当事者を含めたサポート体制構築の可能性が示唆される。さらに, 適応段階によって乗り越えるべき課題が変わっていくため, 各段階に合わせた心理・社会的支援が必要となる。</p>	